

地涌菩薩の数

定方晟

法華經の「從地涌出品」に大地から多数の菩薩が出現することが説かれている。その数を調べてみよう。

釈迦如来は靈鷲山で法華經を説いていた。他の仏の世界からそれを聞きに来ていた菩薩たちがいった。「世尊よ、世尊の滅後に、この世界でこの經典を説くお手伝いをしましょうか」。釈迦はいった。(以下、引用文に番号をつける。)

- (1) 「止めよ、善男子よ。汝等の、この經を護持することを、須^{もち}いず。所以はいかん。わが娑婆世界に、自^{おのずか}ら六万の恒河の沙に等しき菩薩・摩訶薩あり、一一の菩薩に各、六万の恒河沙の眷属あり、この諸の人等は、能くわが滅後において、護持し、誦誦して、広くこの經を説けばなり」(岩波文庫『法華經』中、p. 284、[坂本幸男訳])

娑婆世界の教主・釈迦がこういうと、娑婆世界が震動した。

- (2) 仏、これを説きたもう時、娑婆世界の三千大千の国土は、地、皆、震裂して、その中より、無量千万億の菩薩・摩訶薩ありて、同時に涌出せり。(同上、p. 286)

「無量千万億」は概数である。詳しい数が以下に述べられる。

- (3) この諸の菩薩は、釈迦牟尼仏の所説の音声を聞きて、下より^{あらか}発れ来れり。一一の菩薩は、皆、これ大衆の唱導の首^{はじめ}にして、各六万の恒河沙等の眷属を將いたり。況んや、五万・四万・三万・二万・一万の恒河の沙に等しき眷属を將いたるものをや。況んや、また乃至、一恒河沙・半恒河沙・四分の一、乃至、千万億の那由他分の一なるをや。況んや、また千万億の那由他の眷属なるをや。況んや、億万の眷属なるをや。況んや、また千万・百万、乃至、一万なるをや。況んや、また一千・一百、乃至、一十なるをや。況んや、また五・四・三・二・一の弟子を將いたる者をや。況んや、また^{ただ}単、己れのみにして遠離の行を樂えるものをや。かくの如き等の比^{たぐい}は、無量・無辺にして、算数^{さんじゆ}も譬喩も知る事能わざる所なり。(同上、pp. 284-288)

以上の三つの引用文に現われる数を検討してみよう。

(1)に「六万の恒河の沙」とある。「恒河」は大河ガンジスを意味し、「恒河の沙」はガンジス河の砂の数を、「六万の恒河の沙」はその六万倍の数を意味する。

(2)には「無量千万億」とある。「無量」は不特定の数であるから、引用文(1)の特定の数との比較はできない。(もっとも「恒河の沙」の数も不特定に近い。)

(3)には「五万・四万・三万・二万・一万の恒河の沙」という表現がある。これは「唱導の首」たる菩薩(以下、師の菩薩と呼ぶことにする)の「眷属」たる菩薩(以下、弟子の菩薩と呼ぶことにする)の数を表わしている。引用文(1)では師の菩薩の数として「六万の恒河沙」があげられ、師の菩薩ひとりあたりの弟子の菩薩の数として「六万の恒河沙」があげられただけであるが、(3)では弟子の菩薩の数については「五万の恒河沙」や「四万の恒河沙」の場合もあることが述べられている。「況んや、五万・四万・・・」という表現は、集団は規模が小さいほど成立しやすいということを意味するであろう。また、規模の小さい弟子の集団を率いる師の菩薩は「六万の恒河沙」の弟子を率いる師の菩薩とは別の菩薩であると考えべきであろう。

「況んや、また乃至、一恒河沙・半恒河沙・四分の一・・・」は分数を用いた表現である。分母は1, 2, 4・・・と逡増するから、分数自体は逡減する。「千万億の那由他分の一」は極小の数である。ここで古代インドの数の名を見てみよう。世親の論書『俱舍論』に説かれる「六十数」の初めの十二はつぎのとおりである。

eka (一)、daśa (十)、śata (百)、sahasra (千)、prabheda、lakṣa、
atilaṣa、koṭī、madhya、ayuta、mahāyuta、nayuta、・・・

初めの四つは日常使用されるもので、その概念は明確であり、漢訳者も翻訳に苦勞しない。五番目以降のもので仏典によく現われるのは lakṣa、koṭī、nayuta、である。これらは音写されることが多い(洛叉、俱胝、那由多)。koṭī は「億」と訳されることもある。人名「二十億耳」(śroṇakoṭivimśa)の「億」はその例である。しかし、koṭī を「億」と訳するのが正しいかどうかわからない。大きな数の名は、インドでも中国でも、指示する数を変えることがあるからである。大修館書店の『大漢語林』には、「億」は「昔は十万、後には万万をいう。時に百万・千万をいう。また、非常に多い数」とある。

「千万億の那由他」にも「億」が含まれており、正確な値がわからない。「千

万」に対応するサンスクリット原典の表記は "śata-sahasra" (百千) であるから、翻訳の正確さはいっそう疑われる。しかし、巨大な数を表わすことには間違いはない。これを分母とし、1を分子とする数(いわゆる逆数)は極めて微小な数である。しかし、ガンジス河の砂の数は巨大だから、このような微小な数を乗じても、もとの数はあまり小さくならない。

「況んや、また千万億の那由他の・・・」からはガンジス河の砂の数とは無関係に整数を用いた表現が始まる。「千万億の那由他」は巨大な数であるが、ガンジス河の砂の数を単位として表わす数に比べれば、ものの数ではない。

以上、羅什の訳文の中の数の表現を検討したが、曖昧性はあっても、矛盾はない。ところが、ネパール将来のサンスクリット原典と対照すると、羅什は数の説明を——羅什が依拠した原典がこれと同じであったとすれば——だいぶはしょったことがわかる。上記の(1)(2)(3)に対応する原典の部分を岩本裕氏の翻訳で見てみよう。のちに言及する言葉には下線を付しておく。

- (1´)「良家の息子たちよ、汝らは何故にこの仕事にこだわるのか。良家の息子たちよ、この世において、余に属するサハ世界において、六十のガンジス河の砂の数に等しい幾千万億という求法者がひとりの求法者の随行者となっている。このような求法者たちの中で、六十のガンジス河の砂の数に等しい幾千万億の求法者たちのひとりひとりに、丁度同じ数の求法者が随行しており、かれらは余が入滅した後に、この経説を信奉し、誦誦し、宣揚するであろう。」(前掲書、p. 285)
- (2´) 世尊がこの言葉を語るやいなや、このサハ世界はあたり一面に亀裂が生じて割れた。そして、その割れ目から幾千万億という多くの求法者が現われてきた。(同上、p. 285)
- (3´) かれらはこの大地の下にある中空の世界にとどまって、このサハ世界に寄りかかっていたが、世尊のこのような音声を聴いて、大地の下から現われ出たのである。これらの求法者たちのひとりひとりが、六十のガンジス河の砂の数に等しい求法者を随行者として連れており、いずれも弟子の集団をもつ人であり、弟子の集団の偉大な統率者であり指導者であった。このような弟子の集団の統率者であり指導者である求法者たちの中で、六十のガンジス河の砂の数に等しい幾千万億の求法者たちが、このサハ世界の大地の割れ目から躍り出てきたのであった。まして、五十のガンジス河の砂の数に等しい求法者を随伴す

る求法者たちのいたことは言うまでもなかった。また、四十のガンジス河の砂の数に等しい求法者を随伴する求法者たちのいたことも言うまでもなかった。さらに、三十・二十・十・五つ・四つ・三つ・二つ・一つ・半分・四分の一・六分の一・八分の一・十分の一・二十分の一・三十分の一・四十分の一・五十分の一・百分の一・千分の一・十万分の一・一千万分の一・一千万の百倍分の・一千万の一千倍分の・一千万の十万倍分の・一千万の百万倍の十万倍分の一のガンジス河の砂の数に等しい求法者を随伴する求法者たちもいた。また、幾千万億という多くの求法者を随伴する求法者たちは言うまでもなく、一千万人・十万人・一千人・五百人・四百人・三百人・二百人・一百人・五十人・四十人・三十人・二十人・十人・五人・四人・三人・二人の求法者を随伴する求法者のいたことも言うまでもなかった。ただ一人の随伴者を連れた求法者たちもいたし、随伴者がなく独りで暮らしている求法者たちもいた。このサハ世界において、大地の割れ目から躍り出た求法者たちの数は計算することも比較することもできず、喩えることもできなかった。(同上、pp.287-289)

(1´)の訳は明晰さを欠く。「随行者たる求法者」(=弟子の菩薩)と「被随行者たる求法者」(=師の菩薩)とがいることはわかるが、そのあとに繰り返される「求法者」の語がそのどちらを指すかが明確でないからである。求法者の多さを強調するのがこの文の趣旨であるとすれば、「このような求法者たち」(下線つきの語)は「随行者たる求法者」を指し、この「随行者たる求法者」のひとりひとりにまた多数の随行者がいる、というのでなければならない。すなわち、岩本氏の訳の「このような求法者たちの中で」を「そして」に変えれば、文意は明確になる。

もっと重要な問題を提起するのは、「六十のガンジス河の砂の数に等しい幾千万億」(下線つきの語)という訳である。「六十のガンジス河の砂の数」は途方もなく巨大な数であって、「幾千万億」がこれに「等しい」ということはありえない。「幾」という字があるから単純な比較はできないように見えるが、原文には「万億」という表現はなく、「(数)千」(sahasrāṇi)があるだけである。これを「幾千万億」の意にとるのは無理であろう。

岩本氏は sama を「等しい」と訳したのである(ケルンも同様である)。たしかに sama は「等しい」を意味する。だから、氏の訳には問題はないように見える。しかし、原文にあるのは「(数)千」であって「幾千万億」ではない。原文のように「(数)千」を使って氏の訳を訳しなおせば、「六十のガンジス河の砂

の数に等しい(数)千」となり、このようなことはありえないことが明々白々である。このように、「等しい」と訳すことが無理であるとすれば、**sama** を「等しい数」の意にとり、「(数)千」のほうはそれに対する乗数と考え、問題の文を「六十のガンジス河の砂の数に等しい数の(数)千倍」と訳すことしか方法はないだろう。

(3[〃])には冒頭に「六十のガンジス河の砂の数に等しい」という表現が二度現われる(下線つきの語)。初めの表現はひとりの師の菩薩に随行する弟子の菩薩の数に関してであり、二度目の表現は師の菩薩の数に関してである。どちらの数も巨大であるが、そのこと自体には特に問題はない。しかし、二度目の表現がつぎの「まして、云々」(下線つきの語)という表現に結びつくと、問題が生じる。岩本氏の訳だと、「まして」という言葉が生きてこないのである。「まして」の直前の数(「六十のガンジス河、云々」)は師の菩薩に関しており、直後の数(「五十のガンジス河、云々」)は弟子の菩薩に関しており、二つの数は「まして」という言葉で比較される関係にはないからである。

そこで岩本氏の訳のもとになったサンスクリット原典ではどうなっているかを検討してみよう。

(1[°]) 文⁽¹⁾ **alam kula-putrāḥ kiṃ yuṣmākam anena kṛtyena /**

文⁽²⁾ **santi kula-putrā iha mamaivāsyāṃ sahāyāṃ loka-dhātau ṣaṣṭi-gaṅgā-nadī-vālukā-samāni bodhisattva-sahasrāṇy ekasya bodhisattvasya parivārah /**
文⁽³⁾ **evam-rūpāṇam ca bodhisattvānām ṣaṣṭy eva gaṅgā-nadī-vālukā-samāni bodhisattva-sahasrāṇi yeṣām ekaikasya bodhisattvasyeyān eva parivāro ye mama parinirvṛtasya paścime kāle paścime samaya imam dharma-paryāyam dhārayiṣyanti vācayiṣyanti samprakāśayiṣyanti /** (荻原・土田『梵文法華経』、p. 253)

この文節は三つの文(／で区切られた部分)からなっている。

文(2)には「眷属」(**parivārah**)という言葉がある。つまり、この文は菩薩に師の菩薩と弟子の菩薩がいることを示している。師の菩薩にはその一人ごとに「60 恒河沙×1000」の弟子がいる。(sahasrāṇi を「(数)千」と訳すのはやめる。sahasrāṇi は複数形であるが、それは千が 60 恒河沙あるからにすぎない。)

文(3)は難解である。「このような菩薩たち」(下線つきの語)が師の菩薩を指すのか、弟子の菩薩を指すのか曖昧だからである。私は前半(**parivāro** [下線つきの語]まで)について二つの解釈を考えてみた。(i)このような菩薩たち(=師の菩薩たち)の数は「60 恒河沙×1000」であり、その一人ごとに

(yeṣām ekaikasya bodhisattvasya)「同じように多数の」(iyān <iyat-, "so large")
弟子がいる。師と弟子を合せた菩薩の数は「60 恒河沙×1000」²となる。

(ii) このような菩薩たち (=弟子の菩薩たち) の数は「60 恒河沙×1000」で
あり、その一人ごとに「同じように多数の」弟子がいる。この場合、菩薩の種類
は師と弟子と孫弟子の三種類になるが、師の菩薩の数は示されていないので、そ
の数を χ とすれば、三種の菩薩全体の数は $\chi \times$ 「60 恒河沙×1000」²となる。

その後が続く「かれら」(関係代名詞 ye) は (i) の場合も (ii) の場合も「全
ての菩薩」を意味する。

(i) と (ii) の解釈はどちらがよいか。経典が菩薩の数の多さを強調しよう
としていることを考えれば、(ii) がよいように見える。しかし、後出の (3°)
を見ると、孫弟子の存在は考えられていないようなので、(i) がよいように見え
る。

(2°) samanantara-bhāṣitā ceyam bhagavatā vāg atheyam sahā loka-
dhātuḥ samantāt sphuṭitā visphuṭitā 'bhūt tebhyaś ca sphoṭāntarebhyo
bahūni bodhisattva-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇy uttiṣṭhante sma … (同上、
p. 253)

この文に数字上の矛盾がないことは、羅什訳 (2) のところで述べたとおりである。
ただ指摘すべきは、荻原・土田本の atheyam sahā-loka-dhātuḥ の sahā の
あとのハイフン (複合語を示す) は除かれるべきだということである。sahā
(f. Nom.) は指示形容詞 iyam (f. Nom.) を受ける名詞として独立した語でなけ
ればならないからである。

(3°) ^{*(1)} ye 'syām mahā-pṛthivyām adha ākāśa-dhātau viharanti smemām
eva sahām loka-dhātuḥ niśritya te khalv imam evam-rūpaḥ bhagavataḥ
śabdaḥ śrutvā pṛthivyā adhaḥ samutthitāḥ / ^{*(2)} yeṣām ekaiko bodhisattvaḥ
ṣaṣṭi-gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-parivāro gaṇī mahā-gaṇī
gaṇācāryaḥ / ^{*(3)} tādrśānām bodhisattvānām mahāsattvānām gaṇinām
mahā-gaṇinām gaṇācāryānām ṣaṣṭi-gaṅgā-nadī-vālukopamāni bodhisattva-
koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇi ya itaḥ sahāyā loka-dhātor dharaṇī-vivarebhyaḥ
samunmajjante sma / ^{*(4)} kaḥ punar-vādaḥ pañcāśad-Gaṅgā-nadī-vālukopama-
bodhisattva-parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-vādas
catvāriṃśad-Gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām
bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-vādas triṃśad-Gaṅgā-nadī-

vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām /
kaḥ punar-vādo viṃśati-bodhisattva-parivārāṇām bodhisattvānām
mahāsattvānām / kaḥ punar-vādo daśa-Gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-
parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-vādaḥ pañca-
catus-tri-dvi-Gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām
bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-vāda eka-Gaṅgā-nadī-
vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām mahāsattvānām/ kaḥ punar-vādo
'rdha-Gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām bodhisattvānām
mahāsattvānām / kaḥ punar-vādas catur-bhāga-ṣaḍ-bhāgāṣṭa-bhāga-daśa-
bhāga-viṃśati-bhāga-triṃśad-bhāga-catvāriṃśad-bhāga-pañcāśad-bhāga-śata-
bhāga-sahasra-bhāga-śatasahasra-bhāga-koṭi-bhāga-koṭīśata-bhāga-
koṭīśahasra-bhāga-koṭīśatasahasra-bhāga-koṭīnayutaśatasahasra-bhāga-
gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām bodhisattvānām
mahāsattvānām / kaḥ punar-vādo bahu-bodhisattva-koṭīnayutaśatasahasra-
parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-vādaḥ koṭi-
parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-vādaḥ
śatasahasra-parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-
vādaḥ sahasra-parivārāṇām bodhisattvānām / kaḥ punar-vādaḥ pancaśata-
parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-vādaś catuḥśata-
triśata-dviśata-parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-
vāda ekaśata-parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-
vādaḥ pañcāśad-bodhisattva-parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām /
peyālam / kaḥ punar-vādas catvāriṃśat-triṃśad-viṃśati-daśa-pañca-catus-
tri-dvi-bodhisattva-parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ
punar-vāda ātma-dvitiyāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām / kaḥ punar-
vādo'parivārāṇām eka-vihāriṇām bodhisattvānām mahāsattvānām /
na teṣām saṃkhyā vā gaṇanā vopamā vopaniṣad vopalabhyate ya iha
sahāyām loka-dhātau dharaṇi-vivarebhyo bodhisattvā mahāsattvāḥ
samunmajjante sma / (同上、pp. 253-255)

この文節は四つ以上の文からなっている。

文⁽¹⁾には特に問題はない。

文⁽²⁾の ṣaṣṭi-gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-parivāro は (1°) 文⁽²⁾
の表現に倣って sahasrāṇi を補い、ṣaṣṭi-gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-
sahasrāṇi-parivāro とすべきであろう ((1°) 文⁽¹⁾には vālukā-samāni とある

が、**sama** と **upama** はここではほとんど同義である)。そうすれば、文⁽²⁾の意味は「かれらのうちの一人一人の菩薩は『60 恒河沙×1000』の弟子をもつ」という(1°) *⁽²⁾のそれと同じになる。

文⁽³⁾は「そのような菩薩たち」(下線つきの語)がどの菩薩を指すのか曖昧である。しかし、「そのような菩薩たち」はガナの指導者 (**gaṇinām**) ともされているから、師の菩薩を指すと考えてよいだろう。だが、その場合、「師の菩薩の数は『60 恒河沙』×**koṭi**×**nayuta**×100×1000 である」といつていることになり、疑問が生じる。弟子の菩薩の数ですら、師ひとりにつき「60 恒河沙」×1000 どもりである。上記の師の数は師の数としては多すぎて不自然ではないかという疑問である。

しかし、続く文⁽⁴⁾を参照すると、この問題は全く違う角度から解決できることがわかる。文⁽³⁾の **vālukopamāni** (下線つきの語)を文⁽⁴⁾の冒頭の一文に倣って **vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām** と訂正するのである。では、問題の冒頭の一文を見てみよう。

kaḥ punar-vādaḥ pañcāśad-Gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām bodhisattvānām mahāsattvānām /

kaḥ punar-vādaḥ は「いかにいわんや」を意味する。その後が続くのは(インド風に属格で示された)比較の対象である。つまり、この文の意味は「50 恒河沙の(弟子の)菩薩を従える(師の)菩薩たちが現われることについてはいまださらいうまでもない(当然現れる)」ということである。

この文に見られる **vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām** という表現は文⁽⁴⁾以降の「40 恒河沙」以下でも繰り返される。だから、「60 恒河沙」も元来はこの表現に連結していたことが考えられ、**vālukopamāni** (下線つきの語)は **vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām** の誤写であると推測されるのである。ただし、『梵文法華經写本集成』第8巻、p. 311 の当該箇所を見ると、どの写本も **vālukopamāni** ないし **vālukāsamāni** と記している。誤写が起きたとしたら、かなり早い時期だったことになるだろう。

上記の推測にしたがって、文⁽³⁾を訂正すると、つぎのようになる。

**tādṛśānām bodhisattvānām mahāsattvānām gaṇinām mahā-gaṇinām
gaṇācāryāṇām ṣaṣṭi-gaṅgā-nadī-vālukopama-bodhisattva-parivārāṇām
bodhisattva-koṭi-nayuta-śata-sahasrāṇi ya ita sahāyā loka-dhātor
dharaṇi-vivarebhyaḥ samunmajjante sma /**

この文の意味は「60 恒河沙の数の弟子の菩薩を従える師の菩薩の数はコーティ・ナユタ・百・千である」になると思われ（原文中の三行目冒頭の *bodhisattva-* はないほうがよい）、この数は師の菩薩の数としては自然である。

また、これによって、岩本氏の訳で生きなかった「まして」の意味が生きてくる。「まして」の前後に弟子の菩薩の数が並び、比較が可能になるからである。すなわち、問題の文（前述の（3^ゝ）参照）は「60 恒河沙の数の弟子の菩薩を従える師の菩薩がいる、まして 50 恒河沙の数の弟子の菩薩を従える師の菩薩がいるのは当然」という有意味の文になるからである。

さて、すでに述べたように、「60 恒河沙」云々という文のあとに「50 恒河沙」云々という文がある。そのあとに、「40 恒河沙」、「30 恒河沙」というように、同様の文が数だけを減じながら続く。その中で、「20 恒河沙」に当たるところ、すなわち *viṃśati-bodhisattva-parivārāṇaṃ bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ* の文（下線つきの語）は注目に値する。なぜなら、この文はケルン・南条と荻原・土田の刊本に見られるものであり、『梵文法華經写本集成』第8巻、p.316 に記載される諸写本では *viṃśati* の後ろが *gaṅgā-nadī-vālukopama* となっているからである。

類似の言葉が繰り返される箇所では、誤写や脱落が起きることは珍しくないだろう。『梵文法華經写本集成』第8巻、p.301 を見ると、ネパール本からの引用文（1[°]）^{＊(1)} の *bodhisattva-sahasrāṇy* が中央アジア本では *bodhisattva-koṭī-nayuta-śata-sa(hasrā)ṇi-* となっている。これもどちらかが誤写したことを意味するであろう。

さて、この部分（（3[°]）文⁽³⁾以下）の全体像—菩薩の集団の雲霞のごとき様—をイメージしやすくするために、定形句を略称に換えて全文を示してみよう。「恒河沙に等しい」（*Gaṅgā-nadī-vālukopama*）という言葉は前半のみにあり、後半にはないので、《》を用いて、そのことを示しておく。脱落している文字は【】を用いて補っておく。

◆一人の師の菩薩に従う弟子の菩薩の数のさまざまなケース

略称

kaḥ punar-vādaḥ → KPV（サンディによる語尾変化は無視する。）

Gaṅgā-nadī-vālukopama → GNV

bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ → BM

《GNV のある文》

- ṣaṣṭi-GNV-bodhisattva-parivārāṇāṃ BM /
KPV pañcāśad-GNV-bodhisattva-parivārāṇāṃ BM /
KPV catvāriṃśad-GNV-bodhisattva-parivārāṇāṃ BM /
KPV triṃśad-GNV-bodhisattva-parivārāṇāṃ BM /
KPV viṃśati-【GNV-】bodhisattva-parivārāṇāṃ BM /
KPV daśa-GNV-bodhisattva-parivārāṇāṃ BM /
KPV pañca-catus-tri-dvi-GNV-bodhisattva-parivārāṇāṃ BM /
KPV eka-GNV-bodhisattva-parivārāṇāṃ 【B】M /
KPV 'rdha-GNV-bodhisattva-parivārāṇāṃ BM /
KPV catur-bhāga-ṣaḍ-bhāgāṣṭa-bhāga-daśa-bhāga-viṃśati-bhāga-triṃśad-
bhāga-catvāriṃśad-bhāga-pañcāśad-bhāga-śata-bhāga-sahasra-bhāga-
śatasahasra-bhāga-koṭi-bhāga-koṭiśata-bhāga-koṭisahasra-bhāga-
koṭiśatasahasra-bhāga-koṭinayutaśatasahasra-bhāga-GNV-bodhisattva-
parivārāṇāṃ BM /

《GNV のない文》

- KPV bahu-bodhisattva-koṭinayutaśatasahasra-parivārāṇāṃ BM /
KPV koṭi-parivārāṇāṃ BM /
KPV śatasahasra-parivārāṇāṃ BM /
KPV sahasra-parivārāṇāṃ B 【M】 /
KPV pañcāśata-parivārāṇāṃ BM /
KPV catuḥśata-triśata-dviśata-parivārāṇāṃ BM /
KPV ekaśata-parivārāṇāṃ BM /
KPV pañcāśad-bodhisattva-parivārāṇāṃ BM / peyālam /
KPV catvāriṃśat-triṃśad-viṃśati-daśa-pañca-catus-tri-dvi-bodhisattva-
parivārāṇāṃ BM /
KPV ātma-dvitiyāṇāṃ BM / (己れを第二の者とする菩薩たち)
KPV 'parivārāṇāṃ eka-vihāriṇāṃ BM / (眷属をもたない独住の菩薩たち)
(最後は「娑婆世界の地割れから現われた菩薩の数は測り知れない」という言葉
でしめくられる) /

脱落は三箇所にあるが、【GNV-】はケルン・南条本と荻原・土田本に見られ、
【B】および【M】は荻原・土田本に見られる。

さて、上記のように、定形句を略称に換えて整理してみたが、依然としてイメ
ージは湧きにくい。そこで上記の文から数を示す言葉だけを取りだし、それを算

用数字に換え、単位 GNV を付して示してみよう。

60 GNV

50 GNV

40 GNV

30 GNV

20 GNV

10 GNV

5 GNV

4 GNV

3 GNV

2 GNV

1 GNV

1/2 GNV

1/4 GNV

1/6 GNV

1/8 GNV

1/10 GNV

1/20 GNV

1/30 GNV

1/40 GNV

1/50 GNV

1/100 GNV

1/1000 GNV

1/100000 GNV

1/10000000 GNV

1/1000000000 GNV

1/10000000000 GNV

1/100000000000 GNV

1/100000000000000000 GNV

1000000000000000000

10000000

100000

1000

500
400
300
200
100
50
40
30
20
10
5
4
3
2
1
0

これが師の菩薩が従える弟子の菩薩の数のさまざまなケースの一覧である。師の菩薩の数のほうはコーティ・ナユタ・百・千である。

数についてのこのような詮索はあまり意味のあることではないかもしれない。数が多いことが納得できさえすれば、細かいことは知らなくてよいのかもしれない。法華経が数の矛盾をかかえながら今日まで伝えられてきたことがそのことをよく示しているといえよう。しかし、神聖な経典が矛盾をかかえたまま伝えつづけられるのは問題であろう。地涌の菩薩の数についての詮索は以上で終わるが、最後に、関連する事項について述べてみよう。

地涌の菩薩たちは地上に現われるまえにはどこにいたか。(2)によれば、娑婆世界の三千大千の国土の中である。(3´)によれば、「大地の下にある中空の世界にとどまって、このサハー世界に寄りかかっていたが、世尊の音声を聴いて、大地の下から現われ出た」。

「娑婆」は (sahā) の音訳で、「忍土」はその意識である。この言葉はこの世界が苦を耐え忍ぶ場所であることを意味する。一方、須弥山宇宙観によると、虚空に風、水、金の三種の層からなる巨大な円筒状の物体があり、その上に須弥山という山があり、その周囲を日月が回転し、須弥山の四方に四大陸がある。これを一世界と呼ぶ。この一世界の上下四方に多くの同様の世界があり、それらを千個まとめて小千世界と呼ぶ。この小千世界の上下四方に同様の小千世界があり、

これをまとめて中千世界と呼ぶ。この中千世界の上下四方に同様の中千世界があり、それらをまとめて大千世界と呼ぶ。大千世界は小千、中千、大千の三種の千から構成されるので三千大千世界とも呼ぶ。

娑婆世界と三千大千世界の関係は不詳であるが、おそらく同じものであろう。娑婆世界は釈迦如来の教化の対象である。他の世界は他の仏の教化の対象になっている。釈迦は四大陸の一つ瞻部洲の一角にある靈鷲山で説法しているから、地下から菩薩が現われるというと、一世界の地下から現われるような印象を受けるが、三千大千世界の地下から現われると考えるのが正しいのであろう。しかし、経の作者がそこまで細かくイメージしていたかどうか怪しいから、このような詮索もまた無意味であらう。

従地涌出品の末尾ちかくの偈（梵本の第 46 偈）につぎのような言葉がある。

蓮華の水に在るが如し 地より涌出して
皆、恭敬の心を起こし

原文はこうである。

anūpaliptāḥ padumaṃ va vāriṇā
bhittvā mahīm ye iha adya āgatāḥ /

anūpaliptāḥ は「汚されていない」という形容詞の複数、主格である。この形容詞を受ける名詞は ye という関係代名詞（先行詞はここには示されていない「菩薩たち」）である。その菩薩たちは大地 (mahī) を破って (bhittvā) 現われた (āgatāḥ)。

この偈のすばらしさは "padumaṃ va vāriṇā" という副詞句にある。paduma (Skt. padma) は紅蓮と訳される。vāriṇā は vāri (水) の単数、具格で、「水によって」を意味し、va は副詞で、「のように」を意味する。これらの語に形容詞「汚されていない」を補うと、「水によって汚されない紅蓮のように」という言葉ができる。

この水は蓮華が生えるような場所にある水、すなわち泥水である。paduma は写真で見るとピンク色をしており、いかにも清純な感じがする。「紅蓮」という漢訳は、「紅蓮の炎」や「紅蓮地獄」という表現とともに、煩惱に近いものを連想させがちなので、注意しなければならない。ちなみに、「紅蓮地獄」は寒地獄の名であって、われわれが想像するような火の地獄ではない。

「大地を破って」という表現も勇ましくてよい。菩薩が地下から出現する様が、蓮華が泥土を破って生え出る様に例えられている。蓮華の葉には撥水作用があり、

泥水中^{でいすい}にありながら、一点の染みもつかない。俗界で活躍し、俗界に汚されない菩薩の例えになるために蓮華は存在するかのようである。

蓮華には白蓮 (puṇḍarīka)、紅蓮 (padma)、青蓮 (utpala) などがあるが、頻繁に言及されるのは紅蓮である。チベット仏教で人気の真言「オン・マニ・ペメ・フン」のペメも紅蓮のことである。

私はある日、上野の不忍池の蓮華を見に行った。冬場は淋しかった泥沼が緑の葉とピンクの花で覆われていた。その光景は菩薩が蓮華に例えられることの素晴らしさを理解させてくれた。残念なのは不忍池という名が忍土という名と矛盾することである。しかし、大乘仏教の見地からすれば、これも解決できる。人のこころ清ければ、穢土も浄土となるからである。